



# JET プログラム 30周年記念事業

## JET Programme 30<sup>th</sup> Anniversary

### JET プログラム事業部



1

## JET プログラム 30 周年記念式典概要

(一財)自治体国際化協会 JET プログラム事業部 主査 古谷 弘之

2016年11月7日、京王プラザホテル（新宿）において、皇太子同妃両殿下のご臨席を仰ぎ、総務省、外務省、文部科学省、一般財団法人自治体国際化協会の主催により、JET プログラム 30 周年記念式典を開催した。

JET プログラムは、外国語教育の充実、諸外国との相互理解の増進、地域の国際化の推進を目的として、昭和62年にスタートし、4ヵ国 848 人で始まった草の根の交流が、平成 28 年度は 40ヵ国 4,952 人へと拡大した。JET プログラムは、この 30 年の間に 65ヵ国から約 6 万 5,000 人が参加する世界最大級の人的交流事業に発展してきた。

記念式典には、現役 JET 参加者や国内外で活躍する元 JET 参加者をはじめ、地方自治体関係者等約 720 名が出席し、JET プログラムの 30 年間の歴史と成果を振り返る場となった。

記念式典の第 1 部では、当協会の岡本保理事長が開会挨拶で「JET の皆様方は、日本の各地域の人々と強い絆を持ち、日本の良きサポーターとして大きな役割を果

たしてきました。任期終了後も各国の政府機関や日系企業をはじめ、社会のあらゆる分野で、日本と世界との懸け橋として相互理解の深化に努めてくれています。JET プログラムはこの節目を新たな出発点として、日本と世界のより良い未来のために貢献してまいります。」と述べ、JET プログラムの更なる充実を呼びかけた。

次に、高市早苗総務大臣、岸田文雄外務大臣、松野博一文部科学大臣から主催者挨拶が行われた。

高市総務大臣は、JET プログラム OB・OG の中には、我が国の企業で活躍している方も多く、「内なるグローバル化」にも大きく貢献いただいている。これも、ひとえに、全国各地における「心の通った交流」の積み重ねの果実であると感じている。総務省として、常に時代の要請に応えるものとすべく、一層の充実に向けて努力を続けていくと述べられた。

次に、岸田外務大臣は、JET 参加者の多くは帰国後、親日派・知日派として元 JET 参加者の自主的な集まりである JETAA に加入し、日本文化の紹介や JET プログラムの募集・広報活動などに協力してきている。外務省

は今後も海外における日本への理解を深めるため、JET プログラムを推進していくと述べられた。

最後に、松野文部科学大臣は、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を見据え、外国語の学習指導要領改訂に向けた検討を進めている。特に、2020 年より、小学校の第 3 学年から外国語教育が開始されることに伴い、JET 参加者が果たす役割はこれまで以上に大きくなるため、JET プログラムの更なる充実に努めていくと述べられた。

その後、皇太子殿下からお言葉をいただくとともに、JET プログラムを成功に導いてきた現役・元 JET 参加者を代表して、ライアン・ハタ氏（現役 JET 参加者代表）クワンジュヒョンと権珠賢氏（元 JET 参加者代表）から、「JET 宣言」が発表された。

記念式典の第 2 部では、記念講演として、駐日ジャマイカ大使のリカルド・アリコック氏、駐日カナダ大使のイアン・バーニー氏から講演をいただいた後、仙台市、長崎県五島市、双日株式会社の 3 つの団体から、それぞれ JET プログラムの活動成果報告が行われた。

最初に、仙台市長と仙台市 CIR（国際交流員）から、



岡本理事長の開会挨拶



右から高市総務大臣、岸田外務大臣、松野文部科学大臣、岡本理事長

仙台市での国際交流事業の取り組みについて発表が行われ、次に、長崎県五島市立崎山小学校の児童、教員と ALT（外国語指導助手）から、日頃の授業で取り組んでいる英語を使って五島市の魅力を紹介いただいた。

最後に、双日株式会社の人事総務部グローバル・人材育成課長と元 JET 参加者の社員から、JET 参加者を採用する強みについて報告いただいた。

記念式典の第 3 部では、「JET プログラム動画コンテスト」の表彰式を開催した。JET 参加者の視点から発掘した日本の地域の魅力を動画で伝える本コンテストには、全国各地から 107 作品ものご応募をいただき、最優秀賞のアレクサンダー・バーネット氏をはじめ 10 名が受賞された。

記念式典終了後に開催した記念レセプションでは、歓迎アトラクションとして熊本県水俣市の五ツ太鼓彩流の演舞や長崎市のウクレレグループ“Ukestra”の演奏を披露していただいた。また、熊本県の人気マスコットキャラクターである“くまモン”も応援に駆け付け、五ツ太鼓彩流のみなさんと共演により会場は大いに盛り上がった。

また、30 周年記念式典前日の 6 日には、ホテルサンルートプラザ新宿において、JET 国際会議を開催し、JET プログラムのさらなる発展に寄与するため、JETAA（元 JET 参加者の会）各国代表や AJET（現役 JET 参加者の会）代表等が一堂に会し、今後の活動のあり方や母国と日本との絆を深める取り組みについて議論が行われた。

JET プログラムは、今年度で 30 周年という大きな節目を迎えることができた。これも関係各位の温かいご支援、そして JET プログラムに参加していただいた皆様方の努力と熱意の賜物であると感謝申し上げますとともに、今後も引き続きご支援いただくようお願い申し上げます。

30 周年記念式典の記録をまとめた特設 HP を  
3 月下旬に開設予定です。  
ぜひ、ご覧ください。

## 皇太子殿下のお言葉

本日、JETプログラム30周年記念式典が、世界各国から多くの参加者を迎え、開催されることを大変うれしく思います。

JETプログラムは、我が国の外国語教育の充実や地域レベルでの国際化の推進に寄与し、これまで、65カ国から約6万5,000名が参加する大規模な人的交流事業に発展してきました。

この間、外国青年を受け入れてこられた都道府県、市町村や学校、海外でJETプログラムの広報や参加者の選考に協力してこられた方々など、多くの関係者の皆さんの御尽力により、JETプログラム事業が大きく成長したことは大変喜ばしいことです。

JETプログラムに参加する外国青年は、日本各地の小学校、中学校、高等学校などの外国語指導助手として、また、地方公共団体で国際交流事業に従事する国際交流員として、あるいは、学校などでスポーツ指導に当たるスポーツ国際交流員として、地域の国際化の推進に大きな役割を果たしています。

海外から日本への外国人観光客が増加していることに加え、ラグビーワールドカップ2019日本大会や2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催も予定される中、JETプログラムに参加する外国青年の役割は、将来を担う青少年に対する外国語教育を充実し、地域の国際化を推進する上で、大変意義深いものです。

一方、外国青年にとっても、日本の様々な地域に住み、地元の人々と接することにより、その風土や文化を知ることでできる機会は、とても大切であると思います。また、JETプログラム卒業生が各国で活躍し、その同窓会組織であるJETAAが、世界16カ国に53の支部を有するまでになり、日本文化の紹介やJETプログラムへの支援などを通じて日本との架け橋となっていることを心強く思います。今後、更に世界で活躍するJETプログラム卒業生と日本との絆が深まることを期待しています。

30周年を迎えたJETプログラムが更に発展して、我が国の外国語教育がますます充実し、地域レベルでの国際交流が進展することを願い、私の挨拶といたします。



皇太子殿下からのお言葉

## 2

## JET 宣言 — 私たちが 30 年に培ってきたもの

AJET (現役参加者の会) 全国役員会 (同窓会担当) ライアン・ハタ

「JET 宣言」発表に至るまでの道のりの始まりは、2015 年の 11 月まで遡ります。当時私は AJET (現役 JET で構成された自主的サポート団体) の元 JET 参加者に関する情報収集を担当する役員を務めており、光栄にも元 JET 参加者の集まる「国際会議」に招待されました。

そこでは、JET プログラムに対する意見、JET 参加者の役割の改善・拡大方法、休止していた JETAA International (JETAA-I、世界中の元 JET 参加者の国際的な統括組織) の活動再開などについて話し合わせ、議題の一つとして、AJET はさまざまな国の JETAA 支部の代表とともに、30 周年記念式典において発表する「JET 宣言」の作成を任されました。

AJET の JETAA 担当としての、私の新たな責務は、現役 JET 参加者の「声」を届けるというものでした。JETAA-I の会長としてザンダー・ピーターソンさんが

選出され、ともに JET 宣言の作成に取り組みました。

CLAIR からの助言を参考にしつつ、JETAA-I と AJET のメンバーにより度重なる校正が行われ、最終草案が 10 月の終わり頃に完成しました。この宣言は主に 4 つのパートに分けられ、最初のパートでは日本の各地域の人々と日本政府への感謝について、2 つ目のパートでは、これまで JET プログラムが成し遂げてきたことおよび現役 JET 参加者、JETAA、そして AJET の役割について、3 つ目のパートでは、日本政府と現役 JET 参加者、JETAA そして AJET が協力し合うことにより生まれる相互利益について、そして最後のパートでは、未来の JET 参加者に贈るメッセージが記述されました。

この「JET 宣言」により、現在、過去、そして未来の JET 参加者と日本の人々による国際化への取り組みが、よりいっそう活発となることを祈っています。

## JET 宣言原文

2016 年 11 月 7 日、本日ここに、私たちは、JET プログラムの現役参加者と元 JET 参加者の代表として参集しました。

JET プログラム 30 周年にあたり、私たちは、日本政府の変わらぬご支援に感謝申し上げるとともに、私たちを温かく迎え入れてくださった日本各地域の皆様、友情と真心の気持ちをお示ししたいと思います。

皆様と築いた絆こそが、JET プログラムの根幹をなす部分であり、JET プログラムは、数多くの人々に、真の国際交流の機会を与えてくださいました。

JET プログラムは、日本の生徒達や地域の方々にも多様な文化や価値観に触れる機会を与え、また、日本の地方の魅力を世界に向けて発信することによって、草の根の国際交流を実現させてきました。

現役参加者の支援団体として、AJET は、各々の参加者の能力を最大限に引き出し、日本各地に有意義な影響を与えられるよう、取り組んでいます。また、世界各地にある JETAA とその会員たちは、日本の地方と世界をつなぐという JET プログラムの使命を果たし続けています。

日本企業の国際化が進む中、日本がもっと多様な文化を誇る国となるために、現役参加者が、日本の若者や地域の方々にも与える影響への期待は、かつてない高まりをみせています。私たちは、日本が国際社会における地位を高めていけるよう、日本政府と連携を図りながら、現役参加者や元 JET 参加者の能力向上に務めて参ります。

その一環として、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会とラグビー・ワールドカップ 2019 も視野に、国際イベント成功に向けて取り組む日本政府を、全面的に支援することを誓います。

未来の JET プログラムを担っていく方々に向けては、以下のことを呼びかけたいと思います。日本で過ごす間は母国の“大使”たること、世界中どこにいても“JET という絆”で結びついているという意識を持つこと、配属された地域を理解し地域に“溶け込む”努力をすること、日本の料理、文化、伝統等の身近な“日本”を経験しつくること。

そして、JET を終了した暁には、今や 64,000 人を超え、その存在なくしては JET プログラム自体が存続しえなかった、世界に広がる「JET 卒業生」の一員として、積極的に活動していただきたいと願っています。

本日は「語学指導等を行う外国青年招致事業（JET プログラム）」の創設 30 周年を記念するこの特別な式典でお話しさせていただく機会を賜り、深く感謝申し上げます。また、今年の JET 参加者を派遣する 40 か国の一つとして、カナダとともに、ジャマイカ大使館から本日の式典に出席させていただけることを光栄に存じます。

日本政府によって創設された JET プログラムは、日本全国で草の根の国際化を促進することを第一の目的に掲げています。ご承知のとおり、この目的は、全国の地方公共団体や小学校から高校までの公教育の現場に JET 参加者を配置することによって達成されています。この長年続いている非常に有益なプログラムの究極の目的は、今日のグローバル社会における成功を促す国際ネットワークの構築を推進することです。

JET プログラムの公式文書に示されているように、この成功とは、生涯にわたって続く架け橋を築くことであり、語学教育は、そのきっかけに過ぎません。西半球で米国、カナダに次ぐ 3 番目に大きい英語圏国であるジャマイカの場合、JET 参加者たちがもたらす語学力は、もっと大事な箱を包み込んだ、いわば贈り物のラッピングのようなものです。

この箱には、献身や熱意、革新性、率直さ、抑えきれない喜びがあふれんばかりに詰めこまれており、それによって垣根は直ちになくなり、真の友情が育まれます。ジャマイカの JET 参加者は全般的に赴任先の地域と持続的な温かい関係を築いており、実際に日本に根を下ろすことを決めた参加者もいます。

顕著な例を二つ挙げると、日本語が上達した後、日本でエンターテインメントの道に進み、地元で歌手としてキャリアをスタートさせた JET 参加者もいます。一人は仙台の有名なゴスペルシンガー、もう一人は東京のメジャーレコードレーベルから日本のヒット曲を全曲日本語でカバーしたアルバムをリリースして注目を集めたクラブシンガーです。二人とも日本で人気者になっています。

この二人は、自分自身のためにも、日本の人々のため



にもなり、日本とジャマイカの友好に貢献する形で、JET の経験を基に日本での活躍の場を広げています。

両国の友好関係と相乗効果の例として最近広く知られているのが、数年前から東京で進められている下町ボブスレープロジェクトです。プロジェクトでは、最先端のデザインを基にボブスレーを製作している大田区のコンソーシアムが、ジャマイカチームに 2018 年の韓国・平昌冬季五輪で使用するボブスレーを提供しています。

このパートナーシップへの熱意は、一つには、ジャマイカのボブスレーチームが 1988 年カナダ・カルガリー冬季五輪と 1998 年長野冬季五輪に歴史的な参加を果たしたことで生まれた興奮の記憶によるものでしょう。しかし、下町ボブスレープロジェクトのメンバーが参加を決めた本当の理由がジャマイカのボブスレーチームを描いた映画「クール・ランニング」であったとしても不思議ではありません。私は時々、日本で出会う人たちのほとんど全員がああ記憶に残る映画を見ているかのような印象を受けますし、映画の中で繰り返される「リズムに乗って、風を切れ、突っ走れ、ボブスレータイム！」というフレーズをよく耳にします。

直接の関係はなくても、これらの相乗効果が、JET プログラムで築かれた絆とともに、日本とジャマイカの距離を縮めています。確かに、ブルマウンテンコーヒー

やレゲエ音楽、陸上競技選手の活躍の評判が、ジャマイカの JET 参加者が日本で受け入れられる下地を作っていることは間違いないでしょう。ハリー・ベラフォンテやボブ・マーリー、ウサイン・ボルトのような文化的アイコンの評判も同様です。ジャマイカは実に豊富な恵みを神から与えられています。そして、過去 16 年間で 314 人にのぼるジャマイカの JET 参加者自身もまた、職場の同僚や地域住民の方々、生徒たちの人生に影響を与えることで、日本とジャマイカの距離を近づけ、両国の相互理解を深めることに貢献しています。

しかし、両国が分かち合い、ジャマイカの JET 参加者を支えている既存の友情は、スポーツやエンターテイメントや商品だけにに基づいているわけではありません。ジャマイカは、リオ五輪男子 400m リレーで日本が獲得した同競技初の五輪銀メダルについて日本を祝福し、またアニメや和食、日本の電化製品をこよなく愛していますが、しかし、ジャマイカの日本に対する親近感の土台となっているものは別にあります。その土台は、52 年以上にわたる強固な二国間関係を通じて両国が実現してきた協力の成功によって作り上げられたものです。

日本とジャマイカはこの揺るぎない友情によって、エネルギー、農業、漁業、公衆衛生、保健、インフラ、教育、防災、そしてもちろん語学教育を含む幅広い分野で技術・経済協力を行ってきました。

直近では、日本とカリブ海沿岸国との間では初となる姉妹提携を結び、また米州開発銀行や国連などの多国間フォーラムで緊密な相互協力を行っています。国連総会の重要な採決や、安全保障理事会の関連事項でも、多くの場合、お互いに支え合うことができている。こうしたことを踏まえて、いま話を聞いていらっしゃる JET 参加者の皆さんに非常に重要な点をお伝えしておきたいと思えます。

本日出席されている JET 参加者全員が、それぞれ日本と独自の関係を持つ国から来られています。そのため、多くの方には、日本の同僚や生徒たちとつながり、関係を築くための身近な拠り所があります。これは皆さんの JET としての旅の起点となる心強い基盤ですが、その旅の途中で、二つの否定しがたい事実遭遇することを知っておいてください。

一つ目は、日本のどこに赴任しようと、皆さんは母国の「顔」だということです。場合によっては、赴任した

地域の人々が出会う、皆さんの国の唯一の代表かもしれません。ですから、皆さんはそれぞれの国の個性を示すとともに、優しさや思いやりの心を忘れないことが大切です。

二つ目は、将来は誰にも予測できないため、キャリアの行方はわからないということです。皆さんの中には、外交官になる人や、企業や政府機関、非政府機関で国際的に国を代表して仕事をする人もいるでしょう。そうなれば、いま育てている友情や理解が、皆さんや皆さんの国、あるいは日本にとって、将来大いに役立つかもしれません。ですから、自分を母国の「地域大使」に見立て、明日大きな実りをもたらす種を今日撒いているのだと自覚する習慣を身につけてください。

外交官を職業とする私たちは、赴任した国の日常生活からやや離れて、管理された環境の中で働くことが多いのですが、JET である皆さんは、この素晴らしい国で日頃からさまざまな立場の人々と交流し、地域の多くの人々の生活にプラスの影響をもたらす機会に恵まれています。ですからぜひ、母国の評判を高めながら、日本の人々を愛する責任を真摯に受け止めてください。今日のグローバル社会での成功を促すこれほど素晴らしい方法はありません。

ご清聴ありがとうございました。

皆様、こんにちは。本日は「語学指導等を行う外国青年招致事業（JETプログラム）」の30周年記念式典でお話をさせていただく機会を賜り、光栄に存じます。JETという名前が広く知られているため、正直に申し上げますと、このプログラムの正式名称を確認しなければなりませんでした。

はじめに、この素晴らしい節目を迎えられたことに対し、日本政府関係者の皆様にお祝い申し上げます。特に、このような成功を取めたプログラムの運営を主導する総務省、外務省、文部科学省、一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）のご尽力を心より讃えたいと思います。

この30年の間に、ほぼ2世代のJETがプログラムに参加し、日本への深い理解と関心を持った優秀な人材による世界的なネットワークをつくり上げています。その中で、カナダからの参加者はとりわけ大きな割合を占めています。厳しい冬から逃れるためならどんな遠いところでも行こうとするカナダ人もいます。実は、カナダの外交官も同じ思いです。

私は駐日カナダ大使として最近着任したばかりですが、子供の頃に8年近く過ごした国に戻ることができたという私的な理由と、可能性に満ちた日加関係の発展に力を尽くせるという外交官としての理由から、日本に来られたことを嬉しく思っています。

やや脱線しますが、日本との関係強化はカナダ政府にとって最優先課題の一つです。トルドー首相がアジアの最初の二国間訪問先として日本を選び、5月に訪日したことが、それを明確に表しています。トルドー首相と安倍首相はすでに強固な協力関係を築き、両国のさらなる繁栄と国民の安全を確保する手段として、二国間関係の強化に取り組むことで合意しています。

ここで今日の本題に戻りますが、こうした取り組みに欠かせないのが、人と人とのつながり、特に両国の若者同士のつながりの強化です。人と人とのつながりは、政治、経済、ビジネス、文化などあらゆる分野において、緊密な関係づくりの土台となります。こうした人と人とのつながりは多様な形態をとり、日本とカナダの場合は、



さまざまな友好協会、姉妹都市提携、学術パートナーシップに加え、大勢の観光客や学生、ワーキングホリデー・プログラム参加者が太平洋を越えて双方向に行き来し、その数は増え続けています。

JETプログラムは、日本とカナダの若者の交流や人と人との関わりを活性化する上で極めて重要な役割を果たし、カナダ政府はその価値を高く評価しています。教師の経験を持つトルドー首相は、現代の若者がより多くの機会を得られるようにすることが重要だと考え、自らを若者支援担当大臣に任命しています。これはカナダの政治システムにおいては前例がなく、若者を重視するトルドー政権の姿勢を明確に示しています。

1987年の開始当初は4か国から約850人が参加し、比較的小規模で始まったJETプログラムですが、30年を経た今では、参加40か国が約5,000人を日本各地に派遣する成熟した制度に発展しています。JETプログラムの参加者は累計で約6万5,000人にのぼり、その約3分の2がカナダと米国から参加しています。

しかし、この数字はストーリーの一面を表しているにすぎません。その背後にあるプログラムのインパクトについて考えてみましょう。これまでに世界中から集まった6万5,000人にのぼる将来のグローバルリーダーが、日本の暮らしを肌で体験しながら、この国で人形形成期

を過ごしてきました。参加者たちは日本滞在中に文化的理解を深めながら語学力を高め、日本への生涯変わらぬ親近感を持って帰国した後、世界各地でジャーナリスト、政治家、外交官、学者、教師のほか、作家、音楽家、アーティストなどの多種多様なキャリアに進んでいます。JET プログラムは力強いグローバルネットワークを生み出しているのです！

このように参加者本人、日本と受入れ地域、カナダを含む参加国の三方に有益な「ウィン・ウィン・ウィン」の JET プログラムは文句なしの大成功を収めています。

JET 参加者にとって、JET プログラムは魅力的な国に住み、その文化を直に吸収する機会を提供するものです。さらに、外国語指導助手でも国際交流員でも、その仕事における経験が極めて市場価値の高いスキルを培い、数多くの職種において成功するキャリアへのきっかけとなっています。本日ご出席の元 JET 参加者の方々がその良い例と言えるでしょう。

日本の立場から見ると、政府が国民のグローバルな視点の醸成に取り組む中で、JET を通じて生まれる絆は、生徒や受入れ地域に日本の国境の向こう側に広がる世界を体験させる重要な役割を果たしています。

また、JET 参加者は、職場で具体的に要求される仕事を超えて、ボランティア活動などの支援を通じて地域社会に多大な貢献をしています。その中でも最も心を打たれるのは、先ほどのお話にもありましたが自然災害への対応でしょう。神戸や東北、熊本において、募金や啓発活動を行い、受入れ市町村の復興支援に協力する JET 参加者の姿を繰り返し目にしました。元 JET 参加者も、それぞれの国で積極的に支援活動に携わっています。東日本大震災の際には、発生から数日のうちにカナダ全土の元 JET 参加者の同窓会支部が、被災地支援の募金を呼びかけるイベントや活動を行いました。

JET プログラムの顕著な特徴であり、間違いなくその全体的な成功のカギとなっているのが、地域との強い連帯感であり、参加者の間で育まれる共通のアイデンティティーです。これらは、世界中のさまざまな同窓会活動によって生まれ維持されています。一つ例を挙げると、つい先週も JET 同窓会オタワ支部の創立 25 周年記念パーティーが開催され、現在はそれぞれ異なる分野で活躍しながら、日本での経験と日本への関心という共通の絆で結ばれた元参加者たちが再会を果たしました。同様

の同窓会支部がカナダ全土で、そしてもちろん世界中の参加国で活動しています。

これまでの 30 年を振り返ると、JET プログラムは、日本政府による広報文化外交への非常に賢明な、将来を見据えた投資であったと言えるでしょう。

同時に、JET プログラムは、参加者を派遣する国々にとっても大きな価値があり、カナダは参加者の割合から判断して、おそらく最もその価値を享受しています。

カナダは JET プログラムの長年のサポーターであることに誇りを持っています。カナダ最初の JET 参加者が来日したのは 1988 年のことです。それ以降、カナダから約 9,000 人がプログラムに参加し、うち約 500 人が現在活動中であり、カナダは全体で 2 番目に参加者の多い国となっています。

私たちが「カナダの JET」と呼んでいる、こうした参加者の一人一人が日本とカナダの二国間関係を発展させ、豊かにする上で重要な役割を果たしています。JET プログラムは、毎年多くの才能ある若者を日本全国に送り出しています。赴任先は比較的遠隔地が多く、参加者はそれぞれの地域でカナダに関する知識や理解を伝えることができます。こうした活動は、カナダに対する見方やイメージの基礎を形成する重要なものです。

大使館では毎年、JET 参加者と緊密に協力し、参加者が実質的に担っている責任の重さを伝えて、今後の心構えができるよう準備しています。感心なことに、参加者はこれまで優れた実績をあげており、日本でのカナダへの好感度をあげてくれています。ある意味で私の仕事と競合するわけですが、私はこの「民間大使」を生み出す仕組みを歓迎します。

実際のところ、多くの JET 経験者が外交官の道に進んでいます。外交官は多くの参加者にとって天職です。JET プログラムで培われた国際経験とスキルは、世界中の外務省が強く求める資質そのものだからです。東京の大使館で、JET 経験者の職員がいるのはカナダ大使館だけではないと思います。JET は優秀な人材の宝庫であり、大使館として今後も活用していきます。そうです。これは、皆さんへのヒントです。

最後になりますが、JET プログラムは創設から 30 年の間に大きく発展し、現在では、国境を越えた若者の交流と文化的理解を促進する世界最大規模の最も成功したプログラムの一つとなりました。今後も JET プログラム

がさらに成長し、必要に応じて参加者の雇用を確保する新たな仕組みづくりも含め、時代の変化に対応していくことを期待しています。しかし、基本的には、30年前のプログラム創設につながったビジョンは、当時に勝るとも劣らず、現在でも重要な意味を持っています。

この30年間でJETプログラムが成し遂げた成果につ

いて、日本政府関係者の皆様に改めて敬意を表するとともに、全ての国の参加者の皆さんが今後も引き続きご活躍されることを祈念いたします。このような講演に招かれる大使自身がJET経験者であるという日がいずれ来ることを確信しています。

どうもありがとうございました。

## 5

# JETプログラム活動成果の報告

(一財)自治体国際化協会 JETプログラム事業部 主事 柏井 孝太郎

記念式典第2部では、「仙台市長と仙台市CIR（国際交流員）」、「五島市立崎山小学校児童、教員とALT（外国語指導助手）」、そして「双日株式会社グローバル・人材育成課長と社員（ALT経験者）」によるJETプログラム活動成果の報告が行われた。

## 「杜の都で笑顔のおもてなし」

仙台市CIRでアメリカ出身のメリサ・ヒル氏は、2015年に来日。震災後の日本で日本人のサポートをしたいという思いから、CIRの応募の際には仙台市を希望した。報告では、奥山恵美子仙台市長とともに登壇し、仙台市でのCIRの活躍について発表した。

まず、G7仙台財務大臣・中央銀行総裁会議開催に向け行われた、宿泊施設従業員の外国人客対応力向上事業について説明。この事業は、宿泊施設従業員の受け入れ態勢のレベルアップを目的に実施され、ボランティアとして参加した仙台市CIR、ALTの協力のもと、外国人に

慣れていない日本人従業員に対し、外国人役のJETとして英語で話しかけるなど、研修が行われた。この研修は約40回行われ、プロジェクトリーダーとして活躍したヒル氏は「私たちが通えば通うほど従業員の人も外国人客に慣れてきて、強張った顔からすごく優しい笑顔で接することができるようになった」と事業の成果を語った。

その後、CIRとして、翻訳・通訳のほか、国際交流イベントの企画・運営に携わるヒル氏は、自身が企画した国際交流イベント「ストーンスープ」について語った。このイベントは、アメリカではポットラックと呼ばれる形式を用いており、参加者が自身の好きな食材を持ち寄り、食材の組み合わせを参加者同士で話し合いながら、おいしい鍋を作るというものだ。当初は予算がなかったものの、参加者が食材を持ち寄るなど、CIRの提案により、開催に至ったという。このイベントに対し、奥山市長は「日本語では、同じ釜の飯を食べると言うけれど、同じ鍋を囲んで食べることで、さらに心がつながったことだと思う」と地域との草の根交流を評価した。

報告の最後では、ヒル氏は国際化をどのように受け止め、考えるべきか尋ねられ「日本人は外国人には英語が必要だと思っている人が多いと思うが、本当に必要なのは、英語ではなく笑顔だと思う。笑顔と簡単な日本語で接すればとてもいい印象を受け、外国人はさらに日本のことを好きになるのではないかと自身の経験をもとに語った。



「杜の都で笑顔のおもてなし」報告の様子

## 「ミッション： 五島市の魅力を発信せよ！」

アメリカ出身のダニエル・コーヘン氏は、2011年に来日し、現在五島市教育委員会でALT指導員として活躍している。報告では、五島市立崎山小学校の児童の里道裕大君、川崎奈津美さん、山田萌琉望さんと教員の堤知恵美氏とともに五島市の魅力について発表した。

五島市では、2014年度より「プロジェクトG」と呼ばれる、1～4年生は英語に親しむ活動に取り組み、5、6年生では教科化するという先進的な英語教育に取り組んでいる。今回の報告はこの「プロジェクトG」の成果を示す絶好の機会となった。

報告は、五島市の魅力を伝えるという目的の下、自己紹介、五島市の位置、人口、名所、祭りそして食べ物について、身振り手振りを交えながらすべて英語で行われた。最後には、崎山小学校の児童が歌うカーペンターズの歌「Sing」の動画が上映され、崎山小学校の英語の授業の取り組みに対し、大きな拍手が送られた。



「ミッション：五島市の魅力を発信せよ！」報告の様子

## 「企業が求める外国人材 ～魅力的なJETプログラム参加者～」

JETプログラム経験者でアメリカ出身のジェームス・リージェント氏は、2009年から2年間鷺宮町（※現在の久喜市）のALTとして活躍し、2011年、国内外に多くの拠点を構える総合商社「双日株式会社」に入社した。職場では、機械関連の営業部が持ち込んだ案件について評価し、まとめた後、その案件を進めるかどうかの判断材料を営業部に提供するという役割を担う。



「企業が求める外国人材～魅力的なJETプログラム参加者～」報告の様子

報告では、人事総務部グローバル・人材育成課長の阿部洋司氏とともに登壇し、会社紹介、外国人材を求める理由、JET社員の紹介、そしてJETの魅力について発表した。まず、会社紹介および外国人材を求める理由についての説明があり、国内外のグループ会社を含め480以上の拠点を構える同社が、外国人材を求める理由として阿部氏は「外国におけるビジネスが非常に複雑化して難しくなっていることに伴い、求められる人材も、より高度化・グローバル化してくる。日本人社員の英語力強化や育成だけでは限界があるため、外国人材というものを採用する必要が出てきた」と説明した。

次に、リージェント氏がJET参加者向けの就職イベントで同社と出会い、採用されることとなった経緯などを語った。入社当初は人事総務部の配属となり、日本人社員のグローバルな人材の育成、外国人の現地社員の育成、そして本社の外国人採用を担当していたというリージェント氏は「あるイベントを行う際に、コンセプトの提案から実行するまでの全体のプロセスについて、JETの経験を通して学んだ事が活きた」と、現在の仕事にJETプログラムの経験が生きていることを語った。

その後、阿部氏はJETについて「JETの魅力は、日本語能力や日本文化の知識もさることながら、日本特有の組織の仕組みを知っている外国人であるということ、われわれは非常にJETの力を頼りにしている」とJET経験者を高く評価した。その後、同社で働いているリージェント氏以外のJET参加者も紹介し「引き続きJETの皆さんと共にわれわれ双日は成長していきたい」と今後の抱負を述べた。

第3部では『JET プログラム動画コンテスト』の表彰式を行った。本コンテストは、「JET 参加者が伝える日本の地域」をテーマに、外国人の視点から発掘した日本の地域の魅力を動画に編集し、応募していただくものであり、JET プログラム 30 周年記念事業のひとつとして実施した。

秋冬編と春夏編の2回にわたり動画を募集し、秋冬編には 50 作品、春夏編には 57 作品の合計 107 作品

もの応募を全国各地からいただいた。

審査委員長である東京藝術大学大学院映像研究科教授の岡本美津子氏をはじめ、さまざまな分野で活躍されている7名の審査委員による厳正な審査が行われ、SEASON 賞 4 作品、アイデア賞、PR 賞、最多得票賞、審査委員特別賞 2 作品、そして最優秀賞の全 10 作品が決定した。受賞者 10 名には表彰状のほか、記念メダル、副賞を贈呈した。



〈受賞作品および受賞者〉

賞の種類	受賞作品	受賞者(出身国)	任用団体
最優秀賞	Ekin Kabuki Festival, Akaoka, Japan	Alexander Barnett (オーストラリア)	高知県
最多得票賞	THIS IS JAPAN	Rochelle Mighty (ジャマイカ)	富山県
アイデア賞	A Gourmet Tour of Aomori	Soo Young Park (韓国)	青森県
PR 賞	Tanegashima This is Our Island	Emily Rose Eisemann (アメリカ)	鹿児島県中種子町
SEASON 賞 (春・夏)	Kagura in the Shimane Highlands	Sarah Laverty (オーストラリア)	島根県飯南町
	Definitely More Fun in Hiroshima - きっともっと楽しい広島	Arum Jung (韓国)	広島県
SEASON 賞 (秋・冬)	『千里の道も一歩より』 (Little by little, one goes far.)	Aaron Jones (アメリカ)	大分県杵築市
	Nishiizu, My Little Sunset Town by the Sea	Dana Nyberg (アメリカ)	静岡県西伊豆町
審査委員特別賞	The Kotatsu Train of Iwate - 岩手のこたつ列車	Amanda Wayama (アメリカ)	岩手県
	トンネルを抜けるとそこは「晴れの国」であった	Edouard Brena (フランス)	岡山県高梁市

## 最優秀賞受賞者コメント

### ●元高知県 ALT

アレクサンダー・バーネット氏

まず、JET、CLAIR、そして動画コンテスト関係者の皆さん、この賞をありがとうございます。このコンテストは JET プログラムの 30 周年を祝うのに、とても素晴らしいアイデアだと思います。

動画というのは非常にパワフルです。我々がさまざまなストーリーや文化を共有するのに使いやすく、アクセスしやすい手段だからです。やはり物語を語るということは非常に重要です。経験や思い出というのは、常にさまざまな物語を語り合うことによって強化されていくと思います。この絵金歌舞伎のストーリーを通して、弁天座の中心にあるコミュニティの精神、そして高知県の JET 参加者の精神を伝えることができていると思います。

最後に、このビデオ作成に協力してくれた皆さんに、お疲れさまと、乾杯！ ありがとうございます。

## 表彰プレゼンター講評

### ●一般財団法人自治体国際化協会会長

京都府 山田 啓二 知事

地方創生を成し遂げるのは若者、ばか者、よそ者とよく言われています。1つのことを、愚直と言われても追い求めていく人がいて、そこによそ者の視点加わって、さらに若者がついていくことによって地域がもう一度元気を取り戻すということだと思います。JET の皆様がそれぞれの地域に来られ、その中で一番地域の人と濃厚な絆をつくって、そして地域を愛して動画をつくっていただいた。まさに地方創生を地方自治体が行っていく上で、一番大事にしなければならない点をこの動画コンテストは示しているような気がします。

この動画を、これからどんどんアーカイブとして積み重ねていくことが、JET の歴史と重なっていくことによって、JET プログラムの未来へのさらなる発展があるのだと思います。

### ●全国市長会前相談役

茨城県守谷市 会田 真一 前市長

アイデア賞の受賞作品は本当にその地域のことをよく研究していて素晴らしい作品だなと思いました。PR

賞の受賞作品は彼女が本当に地域に溶け込んで一生懸命やっていることが伝わってきましたし、最多得票賞の受賞作品は日本の美しさがすべて凝縮されているような動画であると感じました。

### ●全国町村会会長

長野県川上村 藤原 忠彦 村長

本当に日本人になりきって、もしかすると日本人ではその瞬間を撮れないところを、しっかりチャンスをつかんで素晴らしい映像を作上げたということで、大変感動しております。日本の皆さんが見ても大変素晴らしい映像でありますし、またぜひ国外に日本の良さをアピールしていただければと思います。

### ●JET プログラム動画コンテスト審査委員長

東京藝術大学大学院 岡本 美津子 教授

審査員一同、皆さんから応募されたたくさんの作品を見ましたが、作品の中で、‘数多く取り上げられたモチーフベスト3’をご紹介します。

第3位は花火です。花火というのは、世界的にはあまり珍しくないと思いますが、日本の中ではご存じのとおり夏の風物詩として知られています。日本は春夏秋冬、四季があって、そこにいろんな行事がある。そういったことを JET 参加者の皆さんは、大変美しく映像にしてくださいました。

第2位はお祭り、伝統行事です。JET 参加者の皆さんは地域に住みつき、そこで行われるお祭り、伝統行事を細やかに撮られていました。

一番多かったモチーフは何でしょうか。会場の皆さん、自分でも動画を撮るとすれば、何を一番撮りたいかなという視点で考えてみてください。JET 参加者が取り上げたモチーフ第1位は日本にいる人々です。

人と人とのコミュニケーションというのがいかに大事か、どんな思い出にも増して人と人との触れ合いがいかに心に残るかということを示していると思います。それと同時に、われわれ日本人が何を大切にしないといけないのかというところを、非常にこの動画コンテストの皆さんはわれわれに教えてくれていると感じています。

## はじめに

JET プログラム 30 周年記念式典に先立ち、11 月 6 日、JET Alumni Association (JETAA、元 JET 参加者の会) の国際組織である JETAA International (JETAA-I) を中心に JET 国際会議が開催され、午前の「JETAA 国際委員会」と午後の「JET グローバル・フォーラム」の 2 部構成で行われた。

本稿では、同会議の当日の様子や議論の内容について紹介する。

## JET の使命は “Exchange” にもあり!

JETAA 国際委員会は 2011 年を最後に休止し、JETAA-I の活動自体も行われない状態にあったが、昨年来より、JET プログラム 30 周年の節目に JETAA-I を復活させようとの気運が高まり、多くの方々のご尽力もあって、新規約の承認、新役員の選出を経て、今夏、新生 JETAA-I として再始動を果たした。

久方振りの開催となった JETAA 国際委員会は、8 回目を数え、世界 17 か国の元 JET 参加者の代表が一堂に会した。新生 JETAA-I の結束力を高め、共通課題の解決や元 JET 参加者のネットワーク強化などを図るため、活発な議論が繰り広げられた。冒頭、2013 年より非公式に活動を続けてきたトリニダード・トバゴ支部の新規加盟が全会一致で承認され、同支部は晴れて JETAA-I の 53 番目の支部に迎えられた。

今回の議論の 1 つに、“少数招致国からの参加者数を増やすためにはどうすべきか” というものがあった。その中で、特に非英語圏の国代表たちから、JET プログラム (JAPAN Exchange and Teaching Programme) の使命は、本来 “Teaching” だけでなく “Exchange” にもあるはずだが、その部分に注目があまりされていないとの指摘があった。日本がこれから真の国際化を目指す上では、英語のネイティブスピーカーだけでなく、むしろ 3 か国語、4 か国語が話せるグローバルな人材を欧州やアジア圏から受け入れようとする姿勢こそが大事

であるというのだ。少数招致国が自国から JET を雇用するメリットをウェブサイト上で紹介するなど、積極的に任用団体にアピールする必要性について多くの代表たちが意見を述べていた。

また JETAA-I のウェブマスターからは、JETAA-I が各国の JETAA 支部の活動を支援し、今後さらに意義ある活動を目指すために、JETAA-I のサイトや SNS の活用が大事だとの話があり、その方策について意見集約が行われた。

## 直に会って “学び合い” —国際会議の意義

午後の JET グローバル・フォーラム (第 1 部) では、各国代表たちのほか、現役 JET 参加者の代表である AJET 全国役員、三省 (総務省・外務省・文部科学省)、CLAIR の代表が加わり、それぞれの立場から JET プログラムのさらなる発展に向けた意見交換が行われた。三省および CLAIR の代表からは、再スタートを切った JETAA-I へ祝意が述べられるとともに、今後 JETAA-I が益々その活動の幅を広げていくことへの期待の声も寄せられた。また、日本で東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会やラグビーワールドカップ 2019 といった国際イベントが続けて開催されることにも触れられ、“日本を理解し、こよなく愛する” JET 参加者たちの協力こそが成功の鍵を握るとの見解も示された。また、今や世界 16 か国、53 支部に広がる JETAA 支部間のさらなる連携・協力について、すでに北米やオセアニアなどで開催されている「JETAA 地域会議」(支部や国をまたがる集まり) の輪が、今後世界各地で一層広がることへの希望も言及された。

一方、JETAA-I 会長からは、「JETAA 国際委員会」の議事内容と、現役 JET 参加者の代表とともに作り上げた「JET 宣言」(※ 30 周年記念式典時に発表) に込めた思いが報告された。その後の自由討論では、元 JET 参加者の各国代表から、JET プログラムを通じて得たかけがえのない経験や JETAA 活動への支援について、三

省および CLAIR に対する感謝の言葉が続いた。それと同時に、こうした国際会議の場で国代表たちが顔を合わせて行う意見交換には、電子媒体を通じたやりとりではなしえない、たくさんの“学び合い”があるとして、国際会議の重要性と今後の継続の意義を訴える発言も多く見られた。

## 東京 2020 大会に向けて —JET 参加者にできる協力とは？

引き続き開催された JET グローバル・フォーラム (第 2 部) は、いわば現役と元 JET 参加者たちの意見交換の場で、今回「東京 2020 大会に向けて現役および元 JET 参加者に求められる役割」がテーマに取り上げられた。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会や東京都の関係者も招き、「機運の盛り上げ」・「ボランティア」・「教育」を切り口に、どのような連携・協力が可能かさまざまな角度から話し合われた。「機運の盛り上げ」のためには、JETAA や AJET が SNS で東京 2020 大会の広報の一端を担おう、例年の国際交流イベントでオリンピック・パラリンピックをテーマに取り上げてはどうかといった案が出ていた。また「ボランティア」については、来日する元 JET 参加者の宿泊場所について AJET が力を借せるのではないかと、といった年代を超えた JET の深い絆を感じさせるアイデアも飛び出した。さらに、オリンピック・パラリンピック「教育」の分野で現役 JET 参加者を効果的に活用するためには、来日オリエンテーションなどの機会を捉えた特別な研修が必要だとの意見が述べられていた。



「JETAA 国際委員会」の議事内容について報告する JETAA-I 会長

## 卒業生たちが広げる JET プログラムの可能性

JET 国際会議の開催を通じて改めて強く感じたのは、「JET プログラム 30 年」の重みである。多くの関係者のご努力の積み重ねが、JET プログラムを世界に誇る人的交流プログラムにまで押し上げた。そして、今や 6 万 4 千名を超える巨大なネットワークは、その規模だけでなく、熱き日本のサポーターたちで構成されるという強みを持つ。さらに、世界各地に 53 の支部を有する JETAA-I が活動を再開させ、中国代表を含む 20 名の国代表が集まり、「連帯感」を深められたことは、今後、JET 卒業生たちの国際的なネットワークがしっかりと根を張り、活躍の場を広げていく上で、意義深いことだったと考えている。

国際会議の場で、各国代表が口々に語った言葉からも、JET 卒業生たちの多くが、母国に帰った後も、日本を想い、日本のために役立ちたいとの熱い想いを持ち続けていることがひしひしと伝わってきた。その想いと、JETAA が誇る広汎なネットワークを有機的につなぐことができれば、さらに大きな力が生まれ、社会にインパクトを与えることもできるに違いない。

30 年前、JET プログラムが産声をあげたとき、本プログラムのここまでの発展を誰が想像しただろうか。そしてこの先さらに月日を重ねたとき、JET 卒業生たちが生み出す力がさらに広がりを持ち、私たちの想像をはるかに超えたものになることを期待したいと思う。



東京 2020 大会に向けた JET の協力についてグループディスカッション



ほかの国代表たちと会って、協力し、励まし合う経験は、いつも僕にインスピレーションを与えてくれる。JET 国際会議は、私たち JETAA-I メンバーの間に“連帯感”を生み出す大きな役割を果たした。皆さんに会えて本当に良かった。

JETAA オーストラリア国代表 イーデン・ローウ



2016年11月、東京で開催されたJETプログラム30年記念式典に招待され、皇太子同妃両殿下と懇談する機会に恵まれたことは、私の人生の中の素晴らしい出来事の一つとなりました。

私は、日本と縁の深いブラジルサンパウロ州レジストロ市に生まれ、3年間国際交流員として岐阜県にお世話になり、両国の絆の深化に貢献させていただきました。日本政府に心より感謝申し上げます。

これから、日系二世であり、外国人でもある私は、日本の「おもてなし」で東京2020年オリンピック・パラリンピックを大いに応援したいと思っています。

JETAA ブラジル国代表 リーナ ハルミ・シミズ



18年近く前にカナダに帰国した元JET参加者として、また、14年間にわたりJETAA活動に携わってきた者として、“復活した”JETAA-I初の国際会議に参加することができ、とても嬉しく思う。実は今回、JETプログラムがこれほど多くの参加国を擁するほど規模を拡大していることに驚いた。限られた時間ではあったが、国代表たちと直に顔を合わせ、共に一つの事柄をなし遂げることができた。特にトリニダード・トバゴを仲間に迎えられたことは喜びだ。また、三省・CLAIRの皆さんが、JETプログラムの継続に真剣に取り組み、私たち元JET参加者の重要性を認めてくださっていることにも感謝する。

JETAA カナダ国代表 グレグ・ジョキン



世界各国から大勢の方々が、協力して共通の目的を達成させるためにJET国際会議に集まる様子に感銘を受けた。会議の成功は、JETプログラムが一貫して、日本と母国の絆をより強めたいと願う人々の心を結びつけることによって、日本と世界の国々との交流に貢献していることの証だ。

JETAA ドイツ国代表 スヴェン・トゥラシェフスキ



初めて国代表の皆さんとお目にかかり、素晴らしい支部活動の取組など多くのことを学んだ。私たちはまた、支部が抱える課題についても議論した。皆様のご協力の下、解決していきたいと考えている。

JETAA支部間の議論、プレゼンテーション、東京2020オリンピック・パラリンピックへの協力の在り方など、全てが実り多いものだった。皇太子同妃両殿下とお目にかかれたのも貴重な経験だ。この30年でJETプログラムは発展し、より強固になった。そして、私もその一部だ。

JETAA インド国代表 ディビヤ・ジャー



30周年記念式典およびJET国際会議の開催に向けて、皆さまが力を尽くして下さったことは明らかだ。いつも万全の体制を整えていただいているお蔭で、行事が滞りなく進行されているのだと思う。本当に素晴らしい30周年行事だった！

JETAA ジャマイカ国代表 ロクサーヌ・シートンチェンバース



各国の代表者たちと直に会い、活動の一端を知り得たことは素晴らしい経験だった。皆さんとアイデアを分かち合い、国境を超えて協力することについて話し合った時、私たちの自主的なJETAA活動が、元JET参加者たちにとって、真に意味を持つものなのだと認識させてくれた。そして何よりも、CLAIRと三省の皆様のご協力のもと、国際会議を開催できたことこそが意義深いと感じている。私たちがなし得ることは数限りなくあり、想像を超える成果をこれからあげることになるだろう。

JETAA ニュージーランド国代表 レイウィン・マクグレガー



会員数が少なく、誕生もない私たち支部にとって、JET国際会議への参加は大きな意味を持った。今回の会議は、元JET参加者の“連帯感”をもたらし、JETプログラムの発展とJETAAの果たし得る役割について、私たちに一致した方向性と新たな使命を与えてくれる会議となった。

JETAA シンガポール国代表 ナタリー・ン



JETプログラムは私の人生を変えた。30周年記念式典およびJET国際会議への参加を通じて、私同様、JETプログラムに大きな影響を受けた方たちが、同じ参加者たちにも、日本の大人や子供たちにもいたことを再認識することができた。30周年を迎えられたこと自体が、国際交流への情熱、分かち合い、成功を示していると思う。

JETAA イギリス（スコットランド）国代表 ジェシカ・ブラウン



JET国際会議を通じて、ほかの国代表と出会えたことばかりでなく、JETAAの活動や成果、あるいは課題を、三省やCLAIRの皆さんと共有できたことも意義深かった。また、三省やCLAIRがJETプログラムの重要さと、私たちJETAAがJET卒業後も、日本との絆を強く保つために懸命に努力を重ねていることをご理解いただけたことも嬉しかった。

皇太子同妃両殿下とお会いできたことも大変光栄なことであり、私たちの誰もがこの経験を忘れることはないだろう。

JETAA イギリス（ウェールズ&イングランド）国代表 セーラ・パーソンズ



新生JETAA-I初の国際会議は、これ以上ない成功を収めた。心温まる議論と絶え間ない笑いが、JETAA-Iメンバー間の強い連帯意識をはぐくみ、自分たちには互いを支え合う国際的なネットワークがあることを気づかせてくれた。JET国際会議の参加者たちは、近い将来JETAA-Iが成し遂げるであろう偉大な成果を想い、興奮した！

JETAA アメリカ国代表（兼JETAA-I会長） ザンダー・ピーターソン

## JET ありがとうキャンペーン： JET 参加者が自治体や学校、地域の方に感謝

(一財)自治体国際化協会 JET プログラム事業部 プログラム・コーディネーター エリック・スミス

JET プログラムを通して 30 年間続いてきた国際交流を記念し、120 名を超える現役 JET 参加者、元 JET 参加者、JETAA 支部、自治体や学校の関係者などから、JET を通じて出会った人たちへの感謝のメッセージや、心惹かれた日本の地域の魅力がソーシャルメディアで世界に発信されました。「JET ありがとうキャンペーン」と称したこのソーシャルメディアキャンペーンは、多くの方に JET プログラムの素晴らしさを再認識していただくため、2016 年 5 月から 12 月まで実施し、JET プログラム 30 周年記念事業をさらに盛り上げました。

39 都道府県および海外 15 か国から送られたメッセージは JET プログラム参加者の多様性や世界に広がる JET の輪の大きさを物語っています。職種、国籍、年齢、性

別を問わず、多くの JET 参加者が地域の方々、自治体・学校関係者の方々の優しさや、日本のおもてなし精神などについて述べました。一方、自治体・学校関係者の方々からは、JET 青年の活動を評価するメッセージが多く寄せられ、草の根の国際交流で成果を上げていることを確認できる機会となりました。

キャンペーンの周知や応募にご協力いただいた自治体の皆様、誠にありがとうございました。キャンペーンは一つの節目を迎えましたが、今後も Facebook や twitter で“ありがとうメッセージ”(#arigatojet)を共有していただき、JET プログラムのよさを引き続き PR していただければと思います。

親愛なる延岡の町へ

この町の皆さんは価値ある教訓を教えてくださいました。それは無私のおもてなしと寛大さです。お返しはできないかもしれませんが、これから日本での経験談を語り継ぐことで恩返しをしていこうと思います。変わらぬ愛をこめて。

マカヤムーア (アメリカ出身、元宮崎県延岡市 ALT)



私は菊陽町教育委員会にとっても感謝しています。教育委員会の皆さんはいつも根気よく、手助けを惜みず私を励ましてくれました。楽しいときも、悲しいときも優しく接して下さったことは一生の思い出です。その寛大さは一言では言い表せません。

ジョリーン・トムリンソン (ジャマイカ出身、現役熊本県菊陽町 ALT)



アリス・パッキエさんへ 3 年間の那須塩原市国際交流員の仕事、本当にお疲れ様でした。3 年という短い期間で、市にとってなくてはならない存在になられたアリスさん、きっと別の場所へ行っても、大活躍されることと存じます。ありがとうございました！！

那須塩原市職員一同からアリス・パッキエ (フランス出身、那須塩原市 CIR) に



尹慈英先生、韓国のことを教えていただき、ありがとうございました。韓国の遊びはとて楽しかったです。尹慈英先生のおかげで韓国のことが大好きになりました。大人になったら韓国に行ってみたいです。

米子市立彦名小学校 3 年生一同から尹慈英 (韓国出身、米子市 CIR) に

